

今週の為替相場見通し(2024年7月29日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		151.95 ~ 157.61	153.79	152.00 ~ 157.00
ユーロ	(ドル)		1.0826 ~ 1.0903	1.0856	1.0800 ~ 1.0900
(1ユーロ=)	(円)		164.85 ~ 171.59	166.93	165.00 ~ 171.00
英ポンド	(ドル)		1.2850 ~ 1.2940	1.2866	1.2700 ~ 1.3000
(1英ポンド=)	(円)	*	195.87 ~ 203.61	197.83	195.00 ~ 202.00
豪ドル	(ドル)		0.6511 ~ 0.6702	0.6547	0.6500 ~ 0.6600
(1豪ドル=)	(円)	*	99.22 ~ 105.43	100.66	100.20 ~ 101.70

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 西 拓也

(1)今週の予想レンジ: 152.00 ~ 157.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

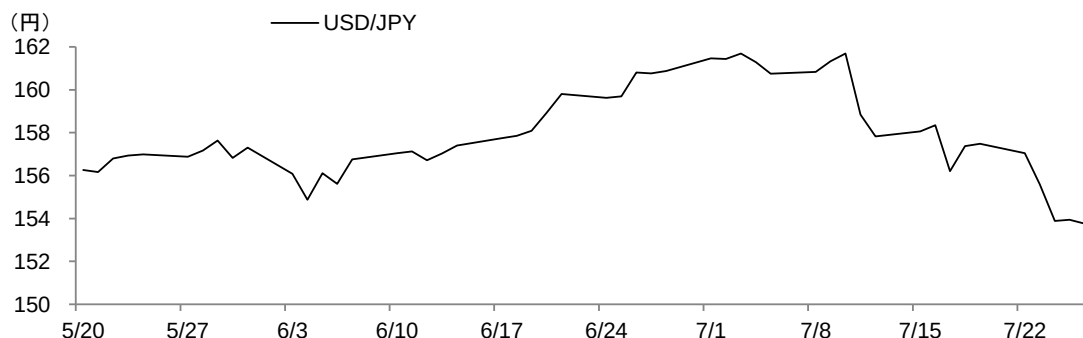
先週のドル/円は円売りポジションの巻き戻しを背景に、一時約2か月半ぶりの安値まで下落した。週初22日、ドル/円は157.42円でオープン。仲値後に付けた157.61円が週高値となり、その後は前週からの流れを受けた円買い相場の中で156円台へ。海外時間は、米金利の反発に連れて157円台を回復した。23日、ドル/円は翌週に日銀金融政策決定会合を控える中、利上げ期待の高まりから一時156円台前半へ。海外時間も同様の流れが続く中、米金利の反発に反し155円台半ばに続落した。24日、ドル/円は日銀金融政策決定会合にて利上げ検討との報道もある中、154円を割り込む展開。海外時間は、米金利低下も相まって一時153円付近に下押ししたが、その後は軟調な米国債入札結果を受けた米金利の反発に合わせ154円付近に値を戻した。25日、ドル/円は日本株の急落を横目に153円を割り込む値動き。海外時間は、約2か月半ぶりの安値となる151.95円まで続落。その後は、米4~6月期GDP(速報値)の良好な結果を背景にドル買いが加速し、154円付近まで反発。26日、ドル/円は、153円台後半での売り買いが交錯後、海外時間に入ると米金利上昇の流れに154円台後半まで買われた。その後、米6月PCE価格指数(前年比)は予想通りの結果となり、利下げ軌道変わらずとの見方から米金利が低下しドル/円も153.10円まで下落。一巡後は153.80円近辺まで値を戻し、結局153.79円で越週した。

今週のドル/円は、30日(火)から31日(水)にかけて日米両国の金融政策会合を控えていることから荒い値動きは避けられない。日銀金融政策会合では国債買入の減額及び利上げの有無が焦点となる。特に後者については、当初ハードルが高いとみられていたが、日銀に対する政府要人からの利上げ要求を経て期待が高まっている。ただ、多数派とは言えず、利上げ決定の場合の急激な円高進行には警戒すべきか。無論、利上げ見送りの場合は足許で急速に進んだ円高が反転するリスクがある。一方、米連邦公開市場委員会(FOMC)では政策金利の据え置きが予想されているため、注目すべきは次回以降の政策スタンスであろう。9月利下げは大方織り込み済みである中、パウエルFRB議長が従来通り「データ次第」とのタカ派姿勢を示す場合には利下げ期待剥落からドル買いとなろう。尚、30日(火)に米6月JOLTS求人件数、8月1日(木)に米7月ISM製造業景況指数、2日(金)に米7月雇用統計と、週を通して重要指標が目白押しとなっている。

(3)先週までの相場の推移

先週(7/22~7/26)の値動き:

安値 151.95 円 高値 157.61 円 終値 153.79 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替デリバティブチーム 升谷 颯

(1) 今週の予想レンジ: 1.0800 ~ 1.0900 165.00 ~ 171.00 円

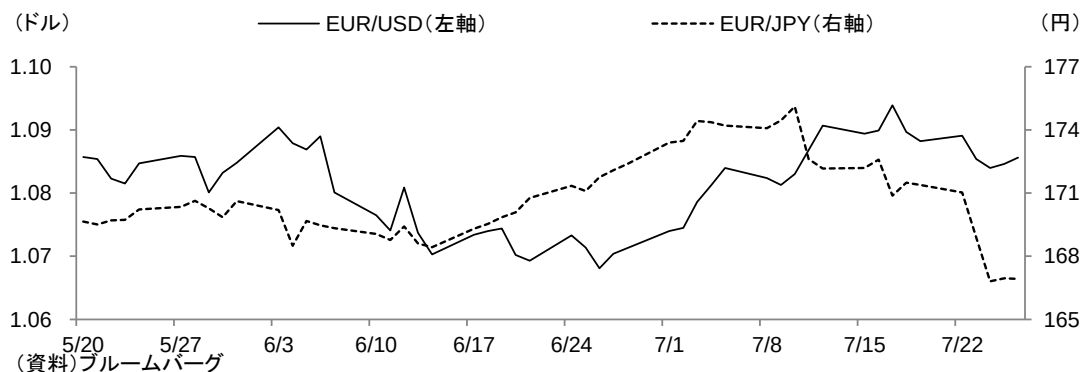
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは、動意に乏しい展開の中、小幅に水準を切り下げた。週初22日、1.0899でオープンしたユーロ/ドルは、米金利が上昇する中ではあったが、1.08台後半を中心として方向感なく推移した。23日、ユーロ/ドルはデギンドスECB副総裁による「9月は意思決定するには適した月である」との次回会合での利下げの可能性を仄めかすハト派的な発言を背景に、独金利低下が重しとなり、1.08台半ばに下落した。24日、ユーロ/ドルは独7月製造業/非製造業PMI(速報)の弱い結果を受け、一時週安値の1.0826に続落した。その後は米金利の上下に振られる展開の中、1.08台半ばを中心とするレンジ推移となった。25日、ユーロ/ドルは材料に欠ける相場環境の中で、米金利低下が下支えとなり一時1.08台後半に上昇したものの、その後は米4~6月期GDP(速報)の上振れを受け米金利が上昇する中、1.08台半ばに値を下げて引けた。26日、米4~6月期PCEデフレーター(前年比)が市場予想通り前回から減速したことを受け米金利が低下する中、ユーロ/ドルは下値しかりで推移し結局1.0856で越週した。

今週は米国では、30日(火)~31日(水)にFOMCが開催される。6月会合は、FF金利の誘導目標を7会合連続で据え置きとなった。声明文では、「ここ数か月間、物価目標に対するさらなる進展は見られない」との文言が、「最近、物価目標に向けた緩慢な更なる進展があった」に変更された。ドットチャートが示すメンバーの政策金利見通しは年内利下げ回数(中央値)に関し、前回発表の3回から1回へ下方修正されたが、同日発表であった米5月消費者物価指数(CPI)の弱い結果を詳細に解釈する時間があれば、年内利下げ回数の見通しは2回が中央値になっていた可能性はある。6月FOMC後、弱い物価指標の公表や、FRB高官のハト派な情報発信などを受け、利下げ期待は再加速傾向となっている。9月利下げが市場のコンセンサスになる中、声明文変化およびパウエルFRB議長会見のスタンスに注目したい。一方、欧州では英中銀政策発表や独4~6月期GDP(速報)、ユーロ圏4~6月期GDP(速報)、独6月CPIといった経済指標の発表が予定されている。ユーロ圏GDPの前年比の値は前期、前々期市場予想対比上振れの結果が続いている。今回もまた上振れる結果となれば、ECBの利下げ期待を後退させ、ユーロ/ドルを下支えする材料となるか。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(7/22~7/26)の値動き: (対ドル) 安値 1.0826 高値 1.0903 終値 1.0856
(対円) 安値 164.85 高値 171.59 終値 166.93



3. 英ポンド

欧州資金部 中島 将行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2700 ~ 1.3000 195.00 ~ 202.00 円

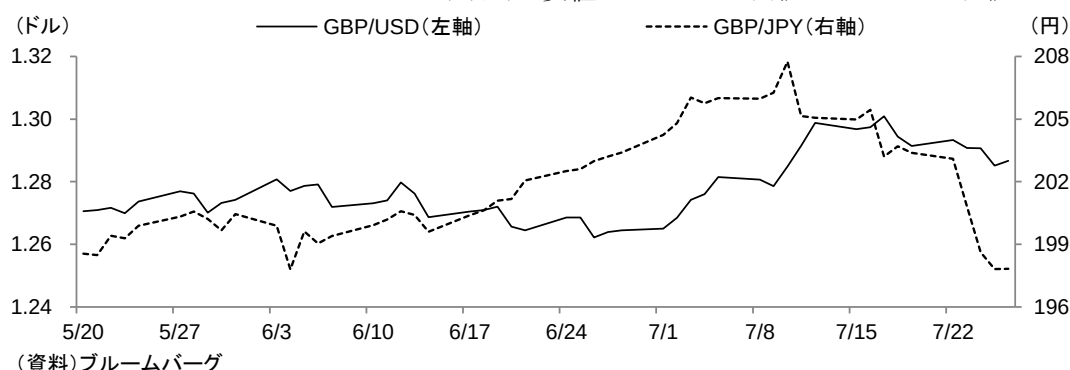
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンドは対ドルで約▲0.4%下落とじりじりと上値の重い展開。為替市場では、日本円の大幅な上昇が目立っており、夏休みを前に、ポジションの巻き戻しが進んでいる印象だ。英国の経済指標では、7月のPMIが発表された。結果は製造業が6月の50.9から51.8に、サービス業が52.1から52.4に上昇し、底堅い結果となった。サービス物価関連のPMI内訳項目も上昇しており、8月1日に控えるイングランド銀行(BOE)の会合での利下げの可能性をやや低下させる内容となった。ユーロ圏、ドイツとの比較では英国経済・政治の安定が目立っており、対ユーロでのポンドの堅調さを支えそうだ。なお、ドイツの製造業・サービス業PMIは前月からの改善が見込まれていたが、市場予想を裏切り前月から悪化するという結果となった。

今週1週間は、8月1日に控えるイングランド銀行(BOE)の金融政策決定会合が焦点となる。7月26日時点で、利下げの織り込みは5分5分の状況だ。6月CPIではサービス価格の高止まりが鮮明となったが、サービス価格に先行する傾向のある賃金の伸び率は5月に鈍化した。また、6月の小売売上高は5月から大幅に落ち込んだ一方、7月PMI速報値では景気回復への期待が継続しサービス価格に関連する項目は上昇が続いている。このように7月に公表された経済指標はまちまちなシグナルを発している上に、様々な一時的要因(またはノイズ)、統計自体の信用度に対する疑念、といった問題がある。また、8月1日の会合から新たに参加するロンバルデリ氏の政策スタンスも未知数の部分が多い。BOEはサービスインフレの一段の低下の証拠を見極めようとする(利下げは見送られる)と見ているが、非常に微妙な判断になることは否めない。英国では、7月29日にリープス財務相が予算案と支出計画発表のタイミングを設定する予定だ。スターマー首相は、7月24日に英国政府が「我々が考えていたよりも深刻な危機」に直面しており、「あらゆる場所で失敗している」と述べる。保守党や、一部のメディアは、こうした「警告」が増税に向けた地ならしではないかと指摘。労働党政権は、所得税、国民保険料、付加価値税、法人税の引き上げの可能性を既に排除しており、キャピタルゲインと相続に関する課税の引き上げや、年金を相続税の範囲内に含める措置、などが発表される可能性が英国メディアでは取り沙汰されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(7/22~7/26)の値動き: (対ドル) 安値 1.2850 高値 1.2940 終値 1.2866
(対円) 安値 195.87 高値 203.61 終値 197.83



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

(1) 今週の予想レンジ: 0.6500 ~ 0.6600 100.20 ~ 101.70 円

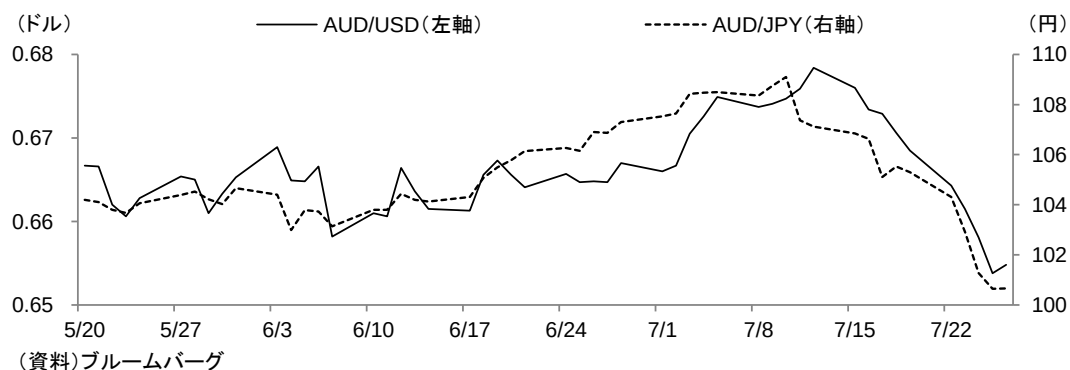
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは0.67台から0.65台まで下落。週初22日、序盤は小高く推移していたが、中国ローンプライムレートが予想外に引き下げられたことを受けて人民元売りが強まると、連れ安の展開となった。一旦0.6660近辺まで下落した後しばらくもみ合ったが、米金利の上昇を背景にNY時間にかけて一段と下落幅を拡大し0.6640近辺で引け。23日、終日かけて売りが優勢となり、0.6615近辺まで下落して引け。金融政策正常化を巡る日本政府関係者の発言を背景に円高が進行し、豪ドル/円は102.95円近辺まで下落した。24日、軟調なコモディティ価格に加え、円キャリートレード巻き戻しの影響から下値を追う展開となり、アジア時間内に0.6585近辺まで下落。NY時間にかけてテクノロジー株を中心に米株に売りが膨らむ中、リスクオフの流れが強まり、豪ドルは一時0.6578まで下落した。尚、日銀による利上げ観測の高まりを受けて円が上昇する中、豪ドル/円は103円台から101円台まで大きく値を下げた。25日、リスクオフの流れが強まる中、序盤から下値を追う展開に。日銀会合を控えたポジション調整からクロス/円が下落し、豪ドル/円は一時99円台前半まで下げ幅を拡大した。NY時間に入り発表された米4～6月期GDP(速報値)では予想以上に成長が加速したことが示され、株価が上昇に転じた。この流れから豪ドルも上昇に反転し、0.6540近辺で引けた。26日、前日の米GDPが予想以上に堅調だったことを受けて、相場は一旦落ち着きを取り戻し、豪ドルは小幅に買い戻された。米6月PCE価格指数がほぼ予想通りだったことを受けて、米国の9月利下げ観測が強まったことも豪ドルのサポート材料となった。0.6550近辺まで上昇して越週。

今週の豪ドルは日銀金融政策会合、FOMC、豪4～6月期CPIの結果を受けての反応になろう。今週は30日(火)米7月コンファレンスボード消費者信頼感、31日(水)中国7月PMI、豪6月小売売上高、豪6月および4～6月期消費者物価指数、日銀政策金利発表、FOMC政策金利発表、8月1日(木)豪6月貿易収支、2日(金)豪4～6月期生産者物価指数、米7月雇用統計等が発表される予定。豪州では3月以降の月次CPIが連続上昇しており、31日(水)に発表される豪4～6月期CPIの結果次第ではRBAが利上げせざるを得なくなる可能性がある。一方、FOMCでは9月利下げへ向けて何らかの布石が打たれると予想されており、条件がそろえば豪ドルは再び上値を追う展開となろう。但し、日銀金融政策会合で利上げが決定された場合、クロス/円のフローに頭を押さえられる可能性には留意したい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(7/22～7/26)の値動き: (対ドル) 安値 0.6511 高値 0.6702 終値 0.6547
(対円) 安値 99.22 高値 105.43 終値 100.66



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。